『桃色の絆・・・生まれくる前、君は天使でボクと会っていた』

カーティス・N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『桃色の絆・・・生まれくる前、君は天使でボクと会っていた』

【Ｎコード】
Ｎ８７７６Ｆ

【作者名】
カーティス・Ｎ

【あらすじ】
病院で赤ん坊の誕生を待っている小学三年生のシンタ君・・夜中にトイレに行くと、どこからか怪しげな声が・・・（生まれくる命と家族の絆を綴りました）

・・　・・　・・　・・

「すーたか　すーたか　すーいすいと」
星を散りばめた夜の空に、のんきな声が響いています。

「お役がすんだら、ごちそう君に　こんにちは、お口のなかでパーリパリ・・。
なあ、いとしの赤ガニくん。あちゃー、こいつはまずい」
声の主は、慌てたように地上に降りていきました。

・・　・・　・・　・・

ー起の章ー

『兄ちゃん、ボールいくよ』
『おう、おもいきりこい』
　新太は、向こうの雲の中にいる弟に声を返しました。

ヒューン
風を切りながら、ボールが飛んできました。
ずいぶん高いようですが、だいじょうぶ。
なんたって、足元はトランポリンのような雲、雲、雲・・

『それっ！』

勢いよくジャンプしました。
スパン！グローブでボールをつかんで、そのままくるりと一回転。
ふわりと降りようとしましたが・・おや、下に小さな子どもが・・
新太を見上げていますが動こうとしません。体をひねって、なんとか避けました。

『あぶないじゃないか！』
両手で顔をおおってしまった子どもにいいました。
子どもは何もいわずに立ったまま、ぽっちゃりした指の間からは涙がこぼれています。

『ごめん。強くいいすぎたみたい。おっとと・・』
優しくなだめようとした新太でしたが、急に体が沈みはじめました。
知らない子どもが流した涙が、雲に穴を開けてしまったのです。

・・た、たすけて！・・
叫ぼうとしましたが、声が出ませんでした。
雲のかけらをつかんだまま、新太はずんずん落ちていき・・

バタン！
足をばたつかせながら、はっと目を覚ましました。
そこは畳がしかれた小さな部屋。となりで、父さんが、牛ガエルのようないびきをかいて寝ていました。

「なんだ。夢だったのか」
新太は、ほっと息をつきました。

ここは、海沿いの町にある病院の二階です、小学三年生の新太と父さんがいるのは、患者の家族が泊まるための部屋です。

母さんは、他の患者さんたちと別の部屋にいます。お腹に赤ちゃんがいるのですが、具合が悪くて、もう　ひと月も入院しているのです。

なんで、新太と父さんが病院にいるのかといえば、ついに今夜、赤ちゃんが生まれることになったからです。晩ごはんを食べている時に「もうすぐ生まれそうです」と電話を受け、かけつけてきたのですが、なかなか生まれてこず、病院に泊まり込むことになったのです。

「ふふ、まだ生まれてもいないのに、弟とキャッチボールをする夢を見るなんて」
にやにやしながらつぶやいた新太でしたが、急にもぞもぞと足を動かしました。

・・おしっこしたくなっちゃった・・
もしや雲から落ちる夢は、おねしょをしないように起こしてくれたのかもしれません。

「トイレ、いきたい」
横を向いている父さんにいいましたが、
「ンガガ、そんなの、ひとりでいってこい。ガガー」
父さんは薄目すら開けようとしません。
「そんなこといったって・・」
かぼそくつぶやきながら起き上がり、そうっと部屋の外に首をだしました。

トイレは、てらてらとぬれているような廊下の端にあります。
昼間はぜんぜん思わなかったのに、その遠いこと遠いこと。入り口にともる青い電球は、手の届かない別の世界にあるようです。

カクンカクン
風が吹き込んでいるのでしょうか、廊下の窓にかかったブラインドが揺れています。

「なにか出てきそう」
怖いのと、おしっこがしたいのが合わさり、体がブルブルと震えました。振り返っても、父さんはいびきをかいたまま。

「えーい、くそう」
歯を食いしばって、歩きはじめました。

明かりがついているのに誰もいないナースステーション、母さんがいる部屋を通り過ぎ、そろそろビクビク・・やっとトイレに到着しました。

「あー、すっきり」
用をすませ、ズボンを上げた時のこと。

《いないいない》

どこからか　かすれた声が聞こえました。ガチン・・体が凍りつきました。

・・誰か後ろに？・・
首に力を入れ、キリリときしむように振り返りましたが、便座がある所は、暗く戸を開けているだけでした。

《いない・・どこだ》
また聞こえました。年をとったお婆さんのようなしゃがれ声・・ど

うやら建物の外から聞こえてきたようです。窓の向こうに、さっと大きな影が走りました。

「まずいよ。早くもどらなくちゃ」

新太は元の部屋に駆けもどろうとしました。けど、肝心の足は棒のようにつっぱって動いてくれません。

やがて廊下から、カリッカリッと硬いものを引っかくような足音が聞こえてきました。

《かくれても、だーめだよ》

さっきの声が、足音とともにやってきます。

「おばけがやってくる」

新太は、ガヂガヂの手で、ポケットをまさぐりました。握りしめたのは、母さんに渡しそびれていた小さなお守りです。

《そうら、出ておいで》

足音が止まりました。ドアの端から白い塊が、ぬうー。

「おばけ、たいさん！」

新太はお守りを投げつけました。

ウガー、グルルルル

お守りは、カパッとあいた口の中に飛び込み、白い塊は、スッテーンと後ろに倒れました。

「ゴクリ・・なんだこりゃ」

喉を鳴らして起き上がったのは、おばけではありませんでした。

「鳥」

大きさは、新太より少し小さいようです。白い体に先っぽの黒い翼、鋭く伸びたくちばしは、銀色に光っているように見えます。
それは、動物園のバードゲージで見たことがあるコウノトリでした。でも普通のコウノトリではなさそうです。背中には、小さなリュックを背おっていて、なんたって言葉を話すのですから。

「こりゃいかん、ひとに見られたらいかん！」
コウノトリは慌てて駆けだそうとしましたが、つるりと滑って、また転んでしまいました。
さっきまでの怖さはどこへやら、新太は思わず吹き出してしまいました。

「ふふ、もう見ちゃったよ。だから逃げないで。もしかして君、赤ちゃんを届けに来たの？」
コウノトリといえば、すぐに思いつくのは、赤ちゃんを運んでいる姿です。それが本当だなんて思っていたわけではありませんが、一応きいてみました。

驚ろいたことに、大きな鳥はこくりと首を垂れました。
「坊ちゃあ、おしゃるとおりでさあ。でもちっと違う。わしが届けに来たのは、天使でさあ。天使が宿って、赤ん坊はこの世界に飛び出すんでさあ」

「そうだよね。だって赤ちゃんの体は、母さんのお腹の中だものね」
新太は深くうなずきました。

「それで君が来たってことは、もうじき、ここで赤ちゃんが生まれるってことだね」
「まあ、そういうことなんで」
新太は飛び上がって喜びました。病院にいるお腹の大きな女のひと

は、母さんだけです。

「早く赤ちゃんの体に、天使を届けてあげて。ぼく、ずっと待ってたんだ。父さんも、もちろん母さんだって」
いいながら、リュックをのぞきこみました。でも、中は空っぽ。後ろのポケットから底にかけて、ビリビリに破れています

「坊ちゃあ、わしはとんでもない失敗をやっちまったんでさあ」
コウノトリは翼に顔をかくすように、首を曲げました。

「もしや、天使、どこかに行ってしまったの？それでさっき、ないないって探してたの？」
「そうでさあ。ここに来る途中で、仲間から美味そうなカニをもらったんす。すぐに食べればよかったのに、リュックのポッケに入れちまった。あいつは、ハサミで穴を開けて逃げだして、そんで、天使もどこかにいっちまったんでさあ」
「そりゃたいへんだ」
新太は腕を組んでうなりました。
目の前のビー玉のような黄色の目には、じんわり涙が浮かんでいます。コウノトリを責めても、どうなるものでもありません。

「それで、君はどうしてここに？天使はいなくなったんでしょう」
「へい、天使には小さな羽根が生えてて、少しは飛べるんす。もしや、こっちにやってきたんではと思ったんでさあ」
「もう、体に宿ったのでは？」
「それならいいんすが、違うようなんす」
悲しそうにくちばしを向けた先、母さんのいる部屋は静まり返ったままです。

「ここにはいない。他を探さないといけないんだね」

「へい、おっしゃるとおり」
首を伸ばしたコウノトリは丁寧にお辞儀をして、開いている窓のへりに飛び移りました。
と、
「あや、グルルル」
喉を大きく鳴らしました。黄色の目は、海辺の方を見つめています。
「あれ、変だ」
新太も声をあげました。
変なのは、歩いて十分もあれば行きつく灯台でした。
光が、暗い空の高い所をさして、ぐるぐると回っています。そんな所に、船が浮かんでいるはずがありません。
「天使はきっとあそこでさあ。急がんと！」
バサリと翼を打ちおろし、コウノトリは、灯台の方に飛んでいきました。
「ぼくも行く。自分のきょうだいのことなんだ」
いびきがもれる部屋を横に過ぎ、新太は階段を駆け降りていきました。

ー承の章ー

夜の海辺はとても静かでした。黒い波がチャポリチャポリと音をたてています。
灯台は入り江にそった散歩道の先にあります。新太は、低く生え伸びた松の木の葉に、体をチクチクさされながら前に進みました。

先ほど空に伸びていた光は、ずいぶん弱まっているようです。目をこらせば、
「やっ、コウノトリ。あんな所に」
光を放つ大きなレンズをかくすように、コウノトリが翼を広げてへばりついていました。

新太は急ぎました。
昔、大砲が備えてあった場所を過ぎ、ほどなく白い灯台にたどりつきました。
高い塀には、漁師さんがかけたのか、魚採りの網がかかっていました。それを梯子にして塀を越え、建物をぐるりと回る階段を登りました。

「坊ちゃあ、来て下さったんすか」
小さなテラスに出た時、しゃがれ声が降ってきました。

「そんな所で何してるんだい」
「天使でさあ。空に光を送ってお迎えの舟を呼ぼうとしてたんでさあ。それを止めようと・・ああ、もうだめ、焼き鳥になっちまう」
熱そうな大レンズにへばりついていたコウノトリが、バサリと落ちてきました。
翼のあちこちに首を突っ込んでいる所を見ると、焼き鳥にはならずにすんだようです。

「天使はどこに?」と見まわせば・・・・いました。
テラスの端、柵の上に、毛糸玉ぐらいの小さな子どもが、空を見上げて座っていました。ムチムチした体の背中には、ウチワのような透明な羽根が生えています。

「ねえ」
そっと近づいて声をかけました。
「ぁぁ」
天使が振り返りました。小さな目は、涙を浮かべてきらめいています。

「どうしちゃったんだい？みんな、君が赤ちゃんに宿るのを待ってるんだよ」
腕を伸ばして抱きしめようとしましたが、天使は、逃げるようにふわりと飛び上がりました。
「だめなの」
「どうしてだい」
「ボク、コウノトリを驚かそうとして、一足先に体に宿ろうとしたんだ。でもその前に、兄弟で楽しそうに遊んでいるあなたの夢を見てしまったんだ」
「あ、あのキャッチボールの夢だね・・そういえば、泣いている子がいた。もしかしたら、君だったの？」
新太は聞きました。
「うん。すごく仲よさそうで、ボクも本当に嬉しかった。けれどあれは、叶うことのない夢のまま」
天使は言葉を詰まらせました。

「そうか、君って男みたいだけど、体に宿ると女になるんでしょう。ぼくが見ていたのは、弟の夢。だから？」
「ううん、そういうことではないんだ。ボク、大きくなってもうまく歩くことができない。お兄さんになるあなたと、キャッチボールをすることもできないんだ」
うつむいた天使の目から、雪のかけらのような涙がこぼれました。

・・うまく歩くことができない・・

天使の言葉に、新太は、喉の奥がつまったような気がしました。それといっしょにクラスメートの圭介の顔が思い浮かびました。

圭介には足の不自由な弟がいて、毎日のように、遠くの病院に訓練に通っています。

母さんが送迎しているので、圭介はいつも留守番ばかり。それに、忙しい母さんを助けるために、掃除をしたり、お弁当だって自分で作って持ってきています。

・・へへ、今日のおかずもミックスベジタブル、これ大好きなんだ・・

圭介はいつもニコニコしていて、文句などいったことはありません。けど、本当に大変そうです。

それと、同じことが自分にも起こってしまうなんて・・

《歩けなくたってかまわない！》

ポイといえたら、どんなに楽なことでしょう。よその人のことなら、そういえたかもしれませんが・・

新太の口は薄く開いたまま、動こうとはしませんでした。

「まずいでっせ、坊ちゃあ。天の舟がこっちに来やす」

コウノトリが叫びました。

空を見上げれば、きらめく星の間から、揺りかごのような形をした金色の小舟が、ゆっくりと降りて来ていました。

「お迎えが来た。短い時間だったけど、お話ができて本当によかっ

た。さようなら」
「ちょ　ちょっと待って。君はどこに行ってしまうの」
震える唇で、新太は聞きました。
「空の彼方にあるすてきな花畑」
天使は涙をぬぐいながら、ふわりと飛び上がりました。
「・・ボクは、そこで育った草の花から生まれたんだ。赤ちゃんに宿らなかった天使は、そこにもどって、他の草花の世話をするんだ」
このままでは天使は行ってしまいます。赤ちゃんは生まれてきません。
・・でも、どうしたら・・
頭を抱えた新太の体を、コウノトリが大きな翼でおおいました。
「坊ちゃあ、天の舟が近づいてまさあ。翼から出ちゃ　だめでっせ。天の舟の漕ぎ手は、天使には優しいが、生きている人間には、鬼みたいに恐いんす」
すぐにも、金色の光が差し込んできました。レースのカーテンをすかしているように、向こうがぼんやりと見えています。
まばゆいばかりの天の舟が、テラスの横に降りてきていました。櫂をにぎる優しい顔をした女の人が、七色の羽衣を振って、天使を招いています。
天使は静かに羽ばたいて、舟に乗り込みました。
「はて、乗り手は一人ですか。ここには、もう一人いるような気がするのですが」

漕ぎ手が、コウノトリに話しかけました。

「こ、ここにいるんは　わしだけでさあ。さっき人間の子どもに触られちまったんで、あんたさまは、そう思っちまったんでさあ」
コウノトリが慌てたように返事をしました。

「天使を運ぶ仕事とは、本当に大変なことですね」
漕ぎ手は納得したようにうなずきました。
「ええまあ。そうでっさねえ」
必死にごまかすコウノトリの翼の後ろで、新太の心はぶすぶすとくすぶっていました。

・・これでいいのか。このまま、天使を行かせてしまっても・・
そんな言葉が耳の奥で、繰り返されていたのです。

ー転の章ー

「坊ちゃあ、もうちっとの我慢でさあ」
コウノトリがささやきましたが、新太には聞こえませんでした。
頭の中は、自分のつぶやきで一杯だったのです。

・・ぼくは赤ちゃんに生まれてきてほしい。でも、そうしたら大変なことが待っているかも知れない。天使はそのことを心配してくれている。ああ、ぼくは、どうなるかもわからない自分のことばかり考えてる・・
・・ぼくは嘘っぱちで甘えん坊。今の気持ちに嘘をついて、優しい天使に甘えている・・
・・これでいいのか、天使を行かせてしまっても・・

ゆらゆらと昇りはじめた舟の上で、後ろ向きに座った天使が、そっと手を振りました。

「・・・！」

胸の内で何かがはじけました。

「やっぱり、行っちゃだめだ」

大声で叫んだ新太は、翼を押して前に飛び出しました。そのままテラスの柵を乗り越えて、空に浮かぶ舟にジャンプしました。

「ああ、坊ちゃあ」

コウノトリが甲高い声をあげました。

「生きている人間が、この天の舟に」

舟の縁にしがみついている新太の目の前に、漕ぎ手の羽衣がありました。

ふんわりと七色だったそれが、見る間にも、硬そうな白い布切れに変わっていきます。

優しそうだった漕ぎ手の顔は、目をつり上げた怖ろしい顔となっていました。

「これより舟の行き先は変わった。生きている人間の乗ったこの舟は、行く先知らず。ならば向かうは、行く先知らずの永遠（とわ）の世界」

低い声でいった漕ぎ手は、ぐいと櫂をかきました。

舟に体を引き上げた新太は、驚いている天使を抱きしめ、すぐにも舟から飛び降りようとしました。

ですが、腕は、漕ぎ手の冷たい片手に捕まえられてしまったのです。

「一度乗った舟、向こうの港に着くまで、降りることは許されぬ」

灯台の光が、バチバチと点滅しはじめました。星のまたたく紺色の空に、真っ黒な穴があきました。

クィコゥ　クィコゥ・・

櫂がかかれるごとに、舟は穴に近づいていきます。中には、片手に何かをもった不気味な白い影が飛び交っていました。時おり止まっては、腕をこちらの方に伸ばしています。

「ぼくは天使を赤ちゃんの体にとどける。あんなわけがわからない世界に行くものか！」

新太は必死に暴れましたが、腕をつかむ力は、万力のように強く、とうてい振りほどけるものではありませんでした。

「お願いです、この人を降ろしてあげてください。この人は、ボクを人の世界に迎えようとしてくれただけなのです」

天使が、体を震わせながら訴えましたが、漕ぎ手は片手でかく櫂を止めようとはしませんでした。

「あなたは心配しないでいいのですよ。用がすんだら、天の花畑に送ってあげますからね」

漕ぎ手の顔は、天使に向けられる時には、元の優しい顔となっていました。

クィコゥ　クィコゥ・・

天の舟は、黒い穴にさしかかりました。

中に飛び交う者たちが間近に見えました。顔のない人の形をした影の一つが、手に持っていたものを、新太の手に握らせました。

それはまるで、透明な入れ物に入った砂時計のようでした。でも、中にあるのは砂ではなく、チラチラと燃える赤い炎と青い水でした。

「こんなもの」
新太はすぐにそれを捨てましたが、飛び交う影が拾い、また握らせました。

「あの者たちは、おまえを迎えようとしている。彼らが渡そうとしているのは、向こうの世界で使う永遠の時計。素直に受け取りなさい。そうすれば、舟はすぐにも港に行きつき、もとの目的地、天の花畑へと向かうことができる」
漕ぎ手がいさめるようにいいました。

「そんなのだめだよ。この人はきちんと生き続けるんだ」
新太の胸に抱かれていた天使が飛び上がり、小さな手で、舟の舳先を押し返しました。

「えーい、わしも手伝いまさあ」
後ろで、怖々と様子をうかがっていたコウノトリが、足の爪を舟に食い込ませて羽ばたきました。

「船の行き先は変えれない」
漕ぎ手は、片手で新太を捕まえながら、櫂をかく手にいっそうの力をこめました。
いったん穴から離れた舟は、また穴に近づきました。

新太の手には、奇妙な時計が握らされ続けました。
少しずつですが、中に入っている炎と水が入れかわっているようです。捨てようとすると、炎は小さく燃えたち、その上に水がぽたんと落ちました。頑張ろうとする気持ちに、冷ややかな水がかけられるようです。

「ぼくが向こうの世界に行けば、天使はすてきな花畑に帰ることができる。それはそれでよいのでは」
時計を見つめる新太の心に、そんな思いがかすめるようになりました。

「お兄ちゃん！
ボ、ボク、お兄ちゃんと一緒に生きる。だから、あきらめないで」
天使の声が響きました。

いつの間にか、新太と天使の胸の間には、桃色をした糸がぶらさがっていました。次第に太くなっていくようです。

「カークルル、こいつぁ」
コウノトリが叫びました
「漕ぎ手さま、見てやって下せえ。二人には誰にも切ることができない絆（きずな）ってもんが生まれてるんす」

「絆は強く美しく、誰にも切ることはできない。たとえ住む世界が違っても、長く伸びて二人を結びつづける」
桃色の糸を見つめながら漕ぎ手はいいましたが、櫂をかく手は止まりませんでした。

やがて、新太の心は疲れはて、天使の羽ばたきも弱まってきました。でも、二人の間に生まれた桃色の糸は消えませんでした。最初よりもずっと太く、今は綱のようにしっかりとしてきています。

「坊ちゃあたち、こうなったら、一か八の賭けでさあ」
コウノトリは、二人の間の桃色の綱をくわえると、水飴のように伸ばしながら、どこかに飛んでいきました。

「さあ、前に前に」
漕ぎ手は、なおいっそうの力を込めて櫂をかき、舟はぐいっと穴に入っていきました。

ー結の章ー

《こら、何してる！》
突然、どなり声が新太の胸に響き、舟がガクンと止まりました。
ぼやけていた目を見開くと、自分と天使の胸から出ている桃色の綱が、途中で合わさり、下の方にぴんと伸びていました。

《子どもだけで、舟に乗ってはだめだ！》
またどなり声です。綱を伝わり、びんびん胸に響いてきます。

《そうよ。どこかに行ってしまったら、どうするの》
優しい声が、あとを追うように響きました。

「父さん、母さん」
新太のつぶやきとともに、綱はぐいぐいと引かれはじめました。
疲れを知らない漕ぎ手は、横板のでっぱりに綱を巻きつけて櫂をかきました。

ズイ・・　ズイ・・
下から引く力は、櫂で進む力よりずっと強く、舟はどんどん引き戻されていきます。
やがて不気味な白い影の腕は届かなくなり、空にあいた穴は、蓋をしたように見えなくなりました。

ミシ、ミシミシ・・
舟がきしみはじめました。横板にヒビが入っています。
今、舟は確かに、元の世界にあります。でも浮いているのは、灯台よりもずっと高い空の上。こんな所で、宙に投げ出されたら怪我をするどころではすみません。新太は壊れかけている舟の上で、どうすることもできませんでした。

バリバリッ
激しい音とともに、横板がはずれました。同時に、他の板もはじけはじめ、あっという間に、舟はばらばらに壊れてしまいました。

「お兄ちゃん！」
くるくると回りながら落ちていく新太の服を、天使がつかみました。懸命に羽根を振るわせていますが、力は弱く、ずんずん下に落ちていきます。

と、ふんわりと体が浮かびました。羽衣をひらめかせた漕ぎ手が、新太を抱きかかえていました。
「はなせ」
新太は怖ろしい腕から逃れようとしました。わけのわからない世界に連れていかれるよりは、下に落ちた方がましです。

「あなたたちが生みだした絆に引かれ、舟は壊れてしまいました。今の私にできることは、天の花畑に送ろうとしていた天使の幸せを応援すること」

どうしたことか、その顔は、天使に向けるのと同じく、優しく微笑んでいました。
漕ぎ手は羽衣の糸を引き抜き、天使の首にかけました。

「これでしっかり飛べるでしょう」
いいながら二人からはなれ、きらめく星の間を昇っていきました。
ズイ・・　ズイ・・
新太と天使は、まだ引っ張られています。海辺を過ぎ、やがて病院が見えてきました。

《ふたりとも、どこにも行ってはだめよ》
《そうだ。どこかに行っちまったら、心配もできないだろ》
声の響きが小さくなっています。桃色の綱はほとんど見えなくなっていました。

「ボク、もうくたくた」
天使の首にかけられた羽衣の糸が消えかっていました。息を切らせた天使が、新太を下に降ろしました。
「坊ちゃあがた、お怪我もなさそうで何よりんす」
そこは緑色の電灯のついた玄関のひさしの上、隣にはコウノトリがとまっていました。新太は天使とともに、無事に病院に戻ってきたのです。

「ありがとう、君のおかげで助かったよ」
のぞきこんだ細長い首をなでながら、新太はいいました。
「お礼なんてとんでもねえす。元はといえば、わしの失敗が引き起こしたことでさあ。それに、家族の絆を運ぶなぞ、滅多にできない仕事ができたんすから」
コウノトリは恥ずかしそうに目玉をくるくると回しました。

「そんで、あんさんはどうするんすか」
新太の前で羽ばたいている天使に、コウノトリが聞きました。

「ボク、はっきりわかった。生まれ出る先には、暖かい家族が待っていてくれるって。だから自信をもって、体に宿れる」
胸を張っていった天使でしたが、少し寂しそうに付け足しました。
「だけど、その時には、今夜のことを忘れてしまってる」

新太は小さな体を、そっと抱き寄せました。
「大丈夫。ぼくがきちんと覚えているから。もし君が寂しそうにしていたら、教えてあげる。君は兄ちゃんを助けてくれた素敵な天使なんだよって」

「きっと、きっとだよ」
天使は微笑みながら新太のほほにキスをし、二階の廊下の開いた窓に飛んでいきました。

「カックルウ。これで、わしのお役はすみました。では、坊ちゃあ、お元気で」
バサバサと翼を打ち鳴らし、コウノトリは空に飛び立ちました。

「さあ、急がなくちゃ」
ひさしから飛び降りた新太は、玄関を押し開け、二階に駆け上がりました。

「父さん、起きて」
「フガガ、なんだ。まだトイレ、行ってないのか」
「違うよ。赤ちゃんが生まれるんだ」
「生まれる？」
ぱちんと目を開いて起きた父さんの大きな手は、重いものでも引っ張ったように赤く腫れていました。

「看護婦さんが教えにきてくれたのか？ぜんぜん気づかなかった」
「そうでなくて、父さんと母さんが、赤ちゃんに宿る天使を、ここまで引っ張ってきたんだよ」
「ふぇっ、確かに何か大切なものをひっぱる夢を見ていたような」
首をかしげた父さんが、腫れた手を見つめ直した時でした。廊下の方が、足音やらベッドをひく音で騒がしくなりました。

「赤ちゃん、とうとう生まれますよ」
部屋をのぞきこんだ看護婦さんがいいました。

「新太、ちょっと体を貸してくれ」
立ち上がった父さんが、太い腕を伸ばし、新太を脇に抱えました。
「急になに」
「自分の力を試しているんだ。これから赤ん坊のために、力が必要になることがあるかもしれない」
そのまま、ずんずんと分娩室に向かって歩きはじめました。

どうやら父さんは、生まれてくる赤ん坊のことを、お医者さんから聞いて知っていたようです。
「いけるぞ。命ってやつは　そんだけで力をくれる。母さんも頑張っているはずだ」
「うん！」
新太は太い腕のなかで身もだえしながらうなずきました。

やがて目の前の扉が開いた時、かぼそいながらも、しっかりした泣き声が飛び出してきました。

《誕生、おめでとう。ぼくは今夜のことを決して忘れない。いつかその時が来たら、きっと君に話してあげる》

・・・　・・・　・・・

「すーたか　すーたか　すーいすい、お役がすんで、すーいすいと・・」

月がぽっかりと顔をだした夜の空に、のんきな声が響いています。

「やや、あんな所に、逃げた赤ガニがいるわい」

声の主は、下に見える浜辺に降りようとしましたが、急に思い直したように羽ばたき、そのまま高く舞い上がっていきました。

「まあいいさ。わしはなんだか腹いっぱい。すーたか　すーたかすーいすいと・・」

・・・　・・・　・・・

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8776f/

『桃色の絆・・・生まれくる前、君は天使でボクと会っていた』

2011年3月27日16時53分発行